HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「人となることは難きを」 : 笠金村「神亀五年戊辰秋八月の歌」についての考察
Author(s)	倉持, しのぶ
Citation	国語国文研究, 140, 46-58
Issue Date	2011-09-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93213
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_140-46-58.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「人となることは難きを」
――笠金村「神亀五年戊辰秋八月の歌」についての考察――

倉持しのぶ

一

神亀五年秋八月、金村は一つの長歌作品を詠んだ。行幸従駕とは関わらないこの作品は「越路」に向けて官命の旅に出る男性を見送る歌であり、万葉集巻九の相聞部に収められている。

神亀五年戊辰の秋八月の歌一首　并せて短歌

人となる　ことは難きを　わくらばに　成れる我が身は　死にも生きも　君がまにまと　思ひつつ　ありし間に　うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　天ざかる　鄙治めにと　朝鳥の　朝立ちしつつ　群鳥の　群立ち去なば　留まり居て　我は　恋ひむな　見ず久ならば（9・一七八五）

反歌

み越路の　雪降る山を　越えむ日は　留まれる我を　かけて偲はせ（一七八六）

かつての諸注釈では「夫が地方官に任ぜられて、赴任するのを送る妻の歌で、金村は何らかの関係からその妻に頼まれて代作したものである」[1]とするものや、「作者とこの旅立つ人との関係は、（中略）いはゆる刎頸の交といふに侔しい間柄と見える」[2]とするもの、「愛人との訣別に、涙をしぼつたものとも考へられないことはないが、この歌は女性の作らしくないから、さうではあるまい」[3]などとするものが見られ、この作品の詠歌主体を男女どちらと考えるのか意見が割れていた。しかし、近年では金村に「娘子に誂へられて作る歌」（巻4・五四三～五四五）などがあることから、金村が女性の立場で詠んだものと解されている。

こうした詠歌主体の問題と関わって重要なのは、長歌冒頭の「人となることは難きをわくらばに成れる我が身は」という大仰な表現や、金村の他の作品（巻8・一四五三、巻9・一七八七）にも見ら

れる「うつせみの世の人なれば大君の命恐み」という表現を用いることで、この作品がどのような特徴をもつものとなっているのかという点である。当該作品は行幸などの公的な場で詠まれたものではないが、長歌という形を持つことや、「大君の命恐み」といった表現、「入唐使に贈る歌」（巻8・一四五三～一四五五）との表現上の類似などからは、制作に際し、ある種の公的・儀礼的な表現が選び取られたことが推測される。聖武天皇の即位前後の一連の行幸に供奉し、硬軟様々な長歌作品を詠んできた金村の作歌活動の一環としてこの作品を捉えてみることとしたい。[4]

二

当該作品について、その制作事情にまで踏み込んで論じたものに梶川信行氏の論[5]がある。梶川氏は当該作品の他、巻三や巻八に収められた金村の歌を同じ北陸方面への旅の歌としてまとめて論じており、当該作品は神亀五年秋に越前国守として赴任する石上乙麻呂に従って下向するにあたり、出発に際して詠まれたものであるとする。しかし、金村が乙麻呂とともに出立したのであれば、当該作品のように「留まれる我」の立場で歌を詠むのは不自然である。また、乙麻呂の越前国守赴任の時期もはっきりしない以上、当該作品の制作の背景に乙麻呂の存在を想定することもためらわれる。本稿ではひとまずそうした問題には踏み込まず、作品の表現に即して考察していくこととする。

さて、当該作品の表現の中で特に目を引くのは長歌冒頭「人となることは難きをわくらばになれる我が身は」という、仏教思想にもとづく表現であろう。この表現については諸注が指摘するように、「涅槃経」の「人身ノ得難キコト優曇華ノ如シ」といった思想が背景にあったと思われる。類似の表現としては集中には他に憶良の「貧窮問答歌」に、

…わくらばに　人とはあるを　人並に　我もなれるを…（5・八九二）

と得がたい人身を得たことが歌われている。また、「人となる」の類例は、

なかなかに　人とあらずは　酒壺に　なりにてしかも　酒に染みなむ（3・三四三）
…いつしかも　人となり出でて　悪しけくも　良けくも見むと大舟の　思ひ頼むに…（5・九〇四）

の二例で、前者が旅人の「讃酒歌」の一首で「人であるよりはいっそ」という思いを歌い、後者が憶良の「男子名を古日を恋ふる歌」で古日が成長して一人前となることを「人となり出でて」と表現している。古日は夭折してしまい、「人となり出」ることは叶わないままとなる。結果として「人となり出」ることは容易ならざることであった。また、旅人歌は「讃酒歌」において「人」であることへの述懐を吐露している歌の中の一首である。「人とある」ことを否定す

るような歌い方ではあるが、その一方で同じ「讃酒歌」で、

この世にし　楽しくあらば　来む世には　虫に鳥にも　我はなりなむ（3・三四八）

と仏教の輪廻転生の思想も詠んでいる。「人とある」ことを否定する一方で、「人とある」ことが本来は〈得難きこと〉であるという認識もあったと思われる。三四三番歌はその「得がたき人身を得るよりも酒壺になって酒に浸りたい」と詠んだものと捉えるべきであろう。

そのような「人」としての「身」であるが、万葉集では「我が身」を歌うときは、

一重のみ　妹が結ふらむ　帯をすら　三重に結ふべく　我が身はなりぬ（4・七四二）

朝影に　我が身はなりぬ　玉かきる　ほのかに見えて　去にし児故に（11・二三九四、12・三〇八五）

のように恋ゆえに痩せたことを歌うものが圧倒的である。これらの歌では恋の苦しみを観念的なものではなく、文字通り「我が身」に起こる出来事として捉えていると考えられる。恋をする主体は〈生身の身体〉として意識されているのである。そして、そのような「我が身」ははかない存在としても意識されていた。

朝日さす　春日の小野に　置く露の　消ぬべき　我が身　惜しけくもなし（12・三〇四二）

露霜の　消易き　我が身　老いぬとも　またをち反り　君をし待たむ（12・三〇四三）

「寄物陳思」に収められた歌で、「我が身」を「露」「霜」といったはかないものに譬えている。

また恋の歌以外では次のような例が注目される。

朝霧の　消易き　我が身　他国に　過ぎかてぬかも　親の目を欲り（5・八八五）

…老いにてある　我が身の上に　病をと　加へてあれば　昼はも　嘆かひ暮らし　夜はも　息づき明かし…（5・八九七）

前者は麻田陽春が死を前にした熊凝の心情を詠んだもので、後者は憶良の「老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また児等を思ふ歌」である。いずれも死を前にしたり、老いを意識したりしたときにその身を詠んだもので、現世における自身の生身の身体を「我が身」と表している。

当該長歌の「我が身」は冒頭からのつながりで言えば仏教的な〈得難き身〉であるが、一方でそれは恋の主体としての〈生身の身体〉でもある。そのことは長歌が続いて、「死にも生きも君がまにまと」と、自らの生死すら委ねてしまうほどの相手への思いを歌うことから確認できる。「君がまにまと」は「君がまにまに」の形が一般的で、相手を思う気持ちの深さを表す常套的な表現として、相聞歌や宴席

歌などに用例が見られる。

たまきはる　吾が山の上に　立つ霞　立つとも居とも　君がまにまに（10・一九一二）

かにかくに　物は思はじ　朝露の　我が身一つは　君がまにまに（11・二六九一）

大舟の　艫にも舳にも　寄する波　寄すとも我は　君がまにまに（11・二七四〇）

武蔵野の　草はもろむき　かもかくも　君がまにまに　我は寄りにしを（14・三三七七）

…秋さらば　黄葉の時に　春さらば　花の盛りに　かもかくも　君がまにまと　かくしこそ　見も明らめめ　絶ゆる日あらめや（17・三九五三）

磯の裏に　常夜日来住む　をし鳥の　惜しき我が身は　君がまにまに（20・四五〇五）

これらの例では、「我」「我が身」などが明示されていない場合でも、自らを相手の意思に委ねると歌う点では同様に考えられる。その中でも、「我が身」を「君がまにまに（と）」と詠むのは、当該例以外では巻十一・二六九一番歌と巻二十・四五〇五番歌であるが、この二つの例では「我が身」の捉え方が正反対である。前者が「朝露の」を冠して「我が身」を消えやすい、はかないものとして歌うのに対し、後者は「惜しき我が身」とその重みを歌う。後者は中臣清麻呂宅での宴席で読まれた歌の一首で、歌を詠んだ顔ぶれなどから「惜しき我が身」について寓意を読み取るかどうかなどの問題を含んでおり[6]、ここでは深く論じる用意はないが、前者については先に確認した恋の主体同様、痩せたり、「露」や「霜」のように消えてしまったりする、頼りなくはかない存在として「我が身」が捉えられていることがわかる。

当該長歌では〈得難き我が身〉すら、思う相手の意思に委ねると歌うところに意味がある。それは、とりもなおさず「君」が「我」にとって絶対的な存在であることを表していると考えられるからである。単に「『我』と『君』との断ち難い関係をまず提示しておいて」[7]というだけではないし、また、

送る相手を自己との関わりの中で規定し、自分にとってどれほど重要な存在であるかを強調することから歌い出す。

と捉えながらも、当該長歌との表現や構造の類似が指摘される「入唐使に贈る歌」（巻8・一四五三）の冒頭、

玉だすき　かけぬ時なく　息の緒に　我が思ふ君は…（8・一四五三）

と同様の表現と看做す[8]だけでは、このような〈絶対性〉を見落としてしまいかねない。「入唐使に贈る歌」は確かに当該長歌とよく似ているが、そうであればこそ、その表現の差異に注目する必要があるのではないだろうか。一四五三番歌の冒頭は、当該長歌に比べて表

現が滑らかで旅立つ男性を見送る女性の口調としては違和感がない。対して当該長歌冒頭は、諸注も指摘するように「叙述が仰々しすぎる」[9]観がある。これは「我」にとっての「君」がいかに絶対的な存在であるかを示すために選び取られた表現であったと考えるべきであろう。

三

〈得難き我が身〉を委ねようとする相手は、「うつせみの世の人」であるために「天ざかる鄙治めに」出立を余儀なくされる。長歌においてこの部分の叙述をつなぐのが「思ひつつありし間に」の句である。「〜間に」は「思いがけない事態の発生を表す接続助詞的用法」[10]で、金村は「難波宮行幸歌」で、

おし照る　難波の国は　葦垣の　古りにし里と　人皆の　思ひやすみて　つれもなく　ありし間に　続麻なす　長柄の宮に　真木柱　太高敷きて　食す国を　治めたまへば…（6・九二八）

と、宮の造営が思いがけず行われたように詠んでいる。当該長歌でも、「君」の鄙への旅立ちは思いがけない事態として描かれていることが確認できる。

その「君」が出立しなければならないのは、「うつせみの世の人」であることによる。この「うつせみの世の人なれば」は続く「大君の命恐み」とひとつながりの表現として、金村には当該作品を含めて三例の用例がある。[11]

玉だすき　かけぬ時なく　息の緒に　我が思ふ君は　うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　夕されば　鶴がつま呼ぶ　難波潟　三津の崎より　大舟に　ま梶しじ貫き　白波の　高き荒海を　島伝ひ　い別れ行かば…（8・一四五三）

うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　磯城島の　大和の国の　石上　布留の里に　紐解かず　丸寝をすれば…（9・一七八七）

金村に特徴的なこの表現については青木生子氏が、「大君の不可抗力的な絶対権威」を前にした「一種諦念への契機を含んだ自覚」[12]と捉え、また、川崎庸之氏は「大王は神にしませば」や「やすみししわご大君」といった表現に比べ、「大君の命恐み」には「一種の〝悒憤〟の情」があるとし、さらに「うつせみの世の人なれば」とともに詠まれる金村作品では、

この世の人である限り、〝大王の御命〟を〝恐〟むことは不可避なのだという発想が根付いてきていることがうかがわれる。[13]

と論じる。また、梶川信行氏は、

この世の人間である以上決して逃れることのできない絶対的な拘束力を持った別れであることを示す——と、幸福な日々を打

ち破るものとして「大君の命」がある。[14]

とし、井ノ口史氏は原文「虚蝉」の表記に注目しつつ、

この「虚蝉」の世に生を受けた以上、「大君」なる絶対的な力の前には従うより他ない。ここに一種の諦観を見いだすのは、決して不当とは言えないであろう。[15]

とする。こうした見方に加え、本稿では「うつせみの世の人なれば」が条件句として働いていることに注目したい。

当該長歌冒頭から確認してきたように、詠歌主体の身体は「我が身」として現実のものと意識されていた。「君」を「うつせみの世の人」と規定するときも、肉体を具えたこの世の存在であることを意識しているとみるべきではないだろうか。肉体を具えてこの世に存在する「うつせみ」であればこそ、この世の理を逃れることはできないのである。そのような「うつせみ（うつそみ）」が詠まれた歌としては、次のような例が参考となる。

うつせみし　神に堪へねば　離れ居て　朝嘆く君　離り居て　我が恋ふる君　玉ならば　手に巻き持ちて　衣ならば　脱く時もなく　我が恋ふる　君そ昨夜　夢に見えつる（2・一五〇）

うつせみと　思ひし時に〈一に云ふ「うつそみと思ひし」〉　取り持ちて　我が二人見し　走り出の　堤に立てる　槻の木のこちごちの枝の　春の葉の　繁きがごとく　思へりし　妹にはあれど　頼めりし　児らにはあれど　世間を　背きしえねば　かぎろひの　もゆる荒野に　白たへの　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちいまして　入り日なす　隠りにしかば　…　うつせみと　思ひし妹が　玉かぎる　ほのかにだにも　見えなく思へば（2・二一〇、二一三もほぼ同じ）

天智天皇崩御時の婦人の歌では、「うつせみ」の身であるゆえに天皇の死という神意には抗えないことを嘆き、人麻呂の「泣血哀慟歌」では「うつせみ」の存在としていわばこの世にあることを自明と受け止めていた妻が「世間」に背くことができずに亡くなってしまい、その姿を求めて探しに行くが叶わないと歌う。どちらも生身の人間としての限界を認識したときに、「うつせみ」という表現が選び取られているのである。

当該長歌では「うつせみの世の人」であることが、「大君の命恐み」鄙へと旅立つことを余儀なくすると歌う。「うつせみの世の人」にとって、「大君の命」、ひいては天皇の存在は絶対的なものである。得難き人身を得た「我」にとって絶対的な存在である「君」、そしてその「君」にとって絶対的な存在である「大君」、当該長歌にはこうした二つの関係が詠み込まれているのである。

ところで、この「君」の出立の様子を歌う長歌の中盤は、しばしば指摘されるように巻十三の長歌と類似する。

み吉野の　真木立つ山に　青く生ふる　山菅の根の　ねもころに　我が思ふ君は　大君の　任けのまにまに〈或本に云ふ

「大君の　命恐み」〉　鄙ざかる　国治めにと〈或本に云ふ「天ざかる　鄙治めにと」〉　群鳥の　朝立ち去なば…（13・三二九一）

三二九一番歌と当該長歌との関係については、金村作品全体に見られる巻十三の歌との表現の類似も含めて論じられてきた。従来は金村作品が巻十三の表現を踏まえたとされてきたが、井ノ口氏は「朝鳥の朝立ちしつつ　群鳥の群立ち去なば」とある当該長歌の方が、「群鳥の朝立ち去なば」とある三二九一番歌に先行する可能性を指摘する。[16]

金村作品と巻十三長歌との関係を考える上では興味深い論考であるが、ここでは作品の先後関係には踏み込まず、表現の差異に注目してみたい。当該長歌や三二九一番歌のように、集団での出立を表す描写を持つ歌には以下のようなものがある。

…新世の　事にしあれば　大君の　引きのまにまに　春花のうつろひ変はり　群鳥の　朝立ち行けば　さすだけの　大宮人の　踏み平し　通ひし道は　馬も行かず　人も行かねば　荒れにけるかも（6・一〇四七）

…大君の　命恐み　食す国の　事取り持ちて　若草の　足結手作り　群鳥の　朝立ち去なば　後れたる　我や悲しき　旅に行く　君かも恋ひむ…（17・四〇〇八）

…たらちねの　母掻き撫で　若草の　妻取り付き　平けく　我は斎はむ　ま幸くて　はや帰り来と　ま袖もち　涙を拭ひ　むせひつつ　言問ひすれば　群鳥の　出で立ちかてに　滞りかへり見しつつ　いや遠に　国を来離れ　いや高に　山を越え過ぎ…（20・四三九八）

群鳥の　朝立ち去にし　君が上は　さやかに聞きつ　思ひしごとく〈一に云ふ「思ひしものを」〉（20・四四七四）

四三九八番歌以外の三例では「群鳥の」は三二九一番歌と同様に「朝立ち」と続き、官人集団が早朝に出立することを表す類型的な表現であったと考えられる。当該長歌のように「朝鳥の」「群鳥の」と対句の形で歌うものは他に例がなく、類似の例としては古事記の、

…愛子やの　妹の命　群鳥の　我が群れ去なば　引け鳥の　我が引け去なば　泣かじとは　汝は言ふとも　やまとの　一本薄　項傾し　汝が泣かさまく　朝天の　霧に立たむぞ…（記・神代）

という歌謡が挙げられるだけである。

「群鳥の朝立ち」という簡潔な表現に比べると、当該長歌の対句を用いた表現は冗長な印象を与えかねない。しかし、あえて対句で表現することで、〈朝〉に〈集団〉で出立する「君」の様子がより詳しく描かれていると考えられる。

また、「朝鳥の」という枕詞は『和歌文学大系』にも指摘があるように人麻呂の、

…朝鳥の　〈一に云ふ「朝霧の」〉　通はす君が　夏草の　思ひしなえて　夕星の　か行きかく行き　大舟の　たゆたふ見れば　慰もる　心もあらず…（2・一九六）

…かぎろひの　もゆる荒野に　白たへの　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちいまして　入り日なす　隠りにしかば…（2・二一〇、二一三もほぼ同じ）

といった作品の影響を受けたものと思われる。鳥の様に早朝に慌しく出立する様を描くためにあえて用いたものとするべきであろう。

このような「君」の出立は、早朝に慌しく大人数の集団で行われたものであることを印象付ける。そうした賑やかな出立と対比されるように、長歌末尾では後に残る「我」の思いが歌われる。

四

長歌末尾は「我は恋ひむな」と別れた後の自らの恋情を想像したものであるが、この表現は集中に類例が多い。

衣手の　別る今夜ゆ　妹も我も　いたく恋ひむな　逢ふよしをなみ（4・五〇八）

大舟の　思ひ頼みし　君が去なば　我は　恋ひむな　直に逢ふまでに（4・五五〇）

家にして　我は　恋ひむな　印南野の　浅茅が上に　照りし月夜を（7・一一七九）

明日よりは　我は　恋ひむな　名欲山　石踏み平し　君が越え去なば（9・一七七八）

朽網山　夕居る雲の　薄れ去なば　我は　恋ひむな　君が目を欲り（11・二六七四）

朝霞　たなびく山を　越えて去なば　我は　恋ひむな　逢はむ日までに（12・三一八八）

雲居なる　海山越えて　い行きなば　我は　恋ひむな　後は相寝とも（12・三一九〇）

…後れたる　我か　恋ひむな　旅なれば　君か偲はむ…（13・三二九一）

東道の　手児の呼坂　越えて去なば　我は　恋ひむな　後は相寝とも（14・三四七七）

「恋ひむな」の句を持つ歌は当該例以外に九例あり、そのうち一一七九番が家で旅先の景を恋しく思い出すことを詠んでいる他は別れた後に相手を恋しく思うことを詠んでいる。また、五〇八番歌と一一七九番歌で男性の立場から詠まれている以外は、旅立った相手を見送る状況での女性の歌と解される。

この推量表現に続き、当該長歌は「見ず久ならば」という条件句を加える。逢えない日が長く続くならば、というこの条件句は、

梓弓　引豊国の　鏡山　見ず久ならば　恋しけむかも（3・三一一）

なかなかに　死なば安けむ　君が目を　見ず久ならば　すべな

かるべし（17・三九三四）

のように、そうなった場合の自らの恋情を想像する表現につながる。また、実際に「見ず久」であった場合は、

あぢの住む　須沙の入江の　隠り江の　あな息づかし　見ず久にして（14・三五四七）

白玉の　見が欲し君を　見ず久に　鄙にし居れば　生けるともなし（19・四一七〇）

のように激しい恋情が歌われる。単なる別れであっても恋しく思うであろうことが予想されるのに、ましてそれが長きにわたる別れであれば、と推量するのである。

このように当該長歌は別れを前にしての離別への悲嘆を詠んでいるが、その悲嘆は「君」という絶対的な存在の不在によってもたらされるものである。「死にも生きも君がまにまと」まで思う相手の不在、それも長期にわたるとなれば、その嘆きはもっと激しいものであるべきではないかとも考えられる。たとえば、先にも挙げた当該長歌との類似が指摘される三二九一番歌では後半において、

…後れたる　我か恋ひむな　旅なれば　君か偲はむ　言はむすべ　せむすべ知らず〈或書に「あしひきの　山の木末に」の句あり〉　延ふつたの　行きの〈或本には「行きの」の句なし〉別れのあまた　惜しきものかも（13・三二九一）

と、別れの辛さを綿々と語っている。それを当該長歌では「我は恋ひむな」と簡潔に歌い収めているのは、これが「うつせみの世の人」ゆえの出立であり、別れであることによるのではないか。「我」にとって絶対的な存在である「君」も、「うつせみの世の人」である以上、絶対的な存在である「大君」の命に従わねばならない。「我」も「君」も、そうしたこの世の理の前には無力な存在にすぎないことを認識した上での詠と考えられる。

当該長歌は「君」の突然の出立を前にした女性が、その別れの避けようのないことを受け入れつつ、別れた後の自らの恋情を思うものである。そこには、当該長歌との類似が指摘される三二九一番歌のように、「旅なれば君か偲はむ」と相手の思いを想像するような表現は全くない。あくまでも「我」にとっての「君」の出立が詠まれるのであり、そこにも「我」にとって「君」の存在が絶対的なものであり、いわば両者が対等な関係にはないという、「我」と「君」との関係のありかたが反映していると言えよう。

「君」から「我」への思いが話題となるのは反歌で、それも「かけて偲はせ」という呼びかけにおいてである。諸注が指摘するように、秋八月の歌で「雪降る山」と詠んだのは、「越路」と言えば雪深い地というイメージが定着していたことによると思われるが、その「雪降る山を越えむ日」に自らのことを「かけて偲はせ」としたのは、それが旅の一番の難所であることによる。

万葉集の旅行く夫を思う妻の歌では、しばしば山路を行く姿を「らむ」を用いて現在推量で詠む。

我が背子は　いづく行くらむ　沖つ藻の　名張の山を　今日か越ゆらむ（1・四三、4・五一一）
朝霧に　濡れにし衣　干さずして　ひとりか君が　山路越ゆらむ（9・一六六六）

こうした表現の背景については、伊藤博氏の「家と旅」という捉え方[17]や、高松寿夫氏の〈留守の歌〉という枠組み[18]など、様々な考察がある。これらの歌の背後に実際的な羈旅信仰を想定するかどうかはともかく、旅中の最も苦しい状態にある夫の様子を思う妻の歌が一つの型として存在していた。だからこそ、金村はそれを逆手に取る形で、

…あさもよし　紀伊道に入り立ち　真土山　越ゆらむ君は　もみち葉の　散り飛ぶ見つつ　にきびにし　我は思はず　草枕旅を宜しと　思ひつつ　君はあるらむと…（4・五四三）

と、本来は辛い山路を行くはずの夫が「旅を宜し」と楽しんでいることを推測し、その姿に嫉妬する妻、という特異な歌を詠んでいたのである[19]。五四三番歌は「大君の行幸のまにま」、すなわち行幸従駕という形での旅であり、そのことが「旅を宜し」とすることを保証していたが、当該長歌は「大君の命恐み」、つまり官命によって越路に向かうのである。その旅は辛く苦しいものであることが予測されたであろう。そのために、当該反歌ではその中でも特に辛い山路において「留まれる我をかけて偲はせ」と呼びかける。

「我」にとって絶対的な存在である「君」、その「君」に旅路の最も辛いときには「我」を「偲はせ」と呼びかける。長歌末尾で「我は恋ひむな」と簡潔に自らの恋情を予測したのと同様、ここでも互いへの思いなどを詳細に語ることはしない。これを、同じ金村の「入唐使に贈る歌」の長歌末尾や反歌と比べてみると、その違いは歴然としている。

…留まれる　我は幣引き　斎ひつつ　君をば遣らむ　はや帰りませ（8・一四五三）
波の上ゆ　見ゆる小島の　雲隠り　あな息づかし　相別れなば（8・一四五四）
たまきはる　命に向かひ　恋ひむゆは　君がみ舟の　梶柄にもが（8・一四五五）

「斎ひつつ」という相手の道中を案ずる表現や「はや帰りませ」という呼びかけ、「あな息づかし」という嘆きや、「君がみ舟の梶柄にもが」という「君」の傍にありたいという欲求は、当該作品では詠まれず、ただ「偲はせ」と呼びかけるだけである。しかし、それがこれからの旅路の最も辛いときには、という前提とともに詠まれるのは、そのような時にこそ自分を思うことでその辛さを乗り越えてほしいという思いからであり、そのような訴えは「君」と「我」の強い結びつきがあって初めて成り立つのではないだろうか。

五

以上、金村の「神亀五年戊辰秋八月の歌」について、その表現の特徴を考察してきた。長歌冒頭の仏典を踏まえた仰々しい表現は「我が身」が〈得難き人身〉であり、しかもその「我が身」すら委ねるほどに「君」が「我」にとって絶対的な存在であることを表していた。しかし、その「君」も「うつせみの世の人」という、この世に肉体を具えた者として、ある日突然「大君の命」で「天ざかる鄙」へ赴くことを余儀なくされる存在であり、そこでは「大君」こそが絶対的な存在として位置づけられている。そうしたことを受け入れつつ、「我」は別れた後の自らの恋情を予測し、「君」に対して旅路の難所では「我を偲はせ」と呼びかける。

〈得難き人身〉を持つ「我が身」も「うつせみの世の人」である「君」も、生身の肉体を具えた存在として、「大君」を絶対とするこの世の理には抗えない。金村は一連の行幸従駕歌において様々な詠歌主体を創出してきた。「娘子に誂へられて作る歌」（巻4・五四三〜五四五）では、行幸に供奉した夫が旅を満喫する様を想像して嫉妬する妻であり、「娘子を得て作る歌」（巻4・五四六〜五四八）では旅先で「娘子」を得る男性官人であり、神亀三年の播磨国印南野行幸歌（巻6・九三五〜九三七）においては、「海人娘子」を見に行きたいと願いながらそれが叶わないことを嘆く男性官人であった。そもそも金村の作歌活動の始発と考えられる志貴親王挽歌（巻2・二三〇〜二三四）においてすでに、親王の死を知らずに葬列と出会う〈我〉という、特異な詠歌主体が用いられていた。こうした一連の試みの延長に、当該作品も位置づけられるのではないだろうか。

金村は当該作品を含め、年代のわかる最後の三つの作品において「うつせみの世の人なれば　大君の命恐み」という表現を用いた。詠歌主体本人についての場合と、当該作品のように思う相手（「君」）についての場合とがあるが、いずれも「大君の命」を絶対のものとして家を離れ、旅寝を余儀なくされることが詠まれており、「うつせみの世の人」とは三例とも男性官人を指している。他の二作品については改めて論じるとして、当該作品について言えることは、「大君の命」は「我」と「君」との結びつき、「我」にとっての「君」の存在の大きさをも無効にするほど絶対的なものであり、「君」と「大君」との関係における「大君」の絶対性の方が優先されるものとして歌われているということである。いわば、ここには「大君」を頂点におく階層的な関係が詠み込まれているのである。

「大君」を頂点とする階層関係は、先に挙げた「娘子に誂へられて作る歌」や印南野行幸歌（巻6・九三五〜九三七）といった、金村の行幸を〈旅〉と捉える作品の世界にも共通する。前者では「大君」、「大君の行幸のまにま」つまり大君に供奉して旅に出かけられる「君」、後に留まる〈娘子〉が階層をなしている。後者の長歌では、

名寸隅の　舟瀬ゆ見ゆる　淡路島　松帆の浦に　朝なぎに　玉藻刈りつつ　夕なぎに　藻塩焼きつつ　海人娘子　ありとは聞けど　見に行かむ　よしのなければ　ますらをの　心はなしにたわやめの　思ひたわみて　たもとほり　我はそ恋ふる　舟梶

をなみ（6・九三五）

とあり、対岸の淡路島の景を見たいと望みながら叶わず、「大夫の心はなしに　たわやめの思ひたわみて」ある男性官人を間に、「海人娘子」に代表される対岸の淡路島の景を見に行くことが可能な「大君」[20]と、「大夫」たる男性官人が自らを否定的に擬えた「たわやめ」とが、同様の階層をなしていると考えられる。いわば、〈大君――大夫――たわやめ（娘子）〉という階層である。

こうした階層の中間に位置する〈大夫〉（男性官人）を、金村は当該作品を含めた三作品で「うつせみの世の人」と定義する。金村にとって、「うつせみの世の人」であるとは何よりも律令国家に生きる男性官人であったということであろうか。

そのような男性官人が旅立ちに際して、一人の女性から〈得難き人身〉を持つ己が身の生き死にすら委ねる程の思慕を詠まれるということは、「大君の命」の前には卑小な存在に過ぎなくとも、その彼を絶対とする女性にとっては唯一無二の存在であることを保証する。〈公〉の世界では「大君」を絶対的な頂点とする関係の中に組み込まれてしまう男性官人が、彼に対する一女性の強い思慕を詠まれることで、生身の人間として捉え直され、いわば〈私〉的な関係の中に位置づけ直されるのである。〈公〉と〈私〉が交錯するところに当該作品は成り立っていると言うこともできる。

そして、当該長歌のような女性の思いは表現としては極めて特殊なものであるが、「うつせみの世の人」として愛する者との離別を余儀なくされる多くの男性官人たち、当該作品であれば「群鳥の　群立ち去なば」と詠まれる官人たち、その一人ひとりにも彼を絶対の存在とする者があったはずである。その意味で当該作品は、特定の女性から特定の男性官人への思いを詠んだ個人的な詠というにとどまらない、普遍的な性格を有するものであると言えよう。

当該作品には旅立つ者の安全を祈る言葉は詠まれていないが、後に残るこのような女性の存在や思いは、旅立つ者にとって何よりの「斎ひ」となったのではないか。そうであるならば、当該作品において、〈公〉の世界に属し〈公〉的な旅に出る男性を支えたのは、〈私〉の関係に基づいた、一女性の〈私〉的な恋情であったということになろう。

注

1　窪田空穂『万葉集評釈』
2　金子元臣『万葉集評釈』
3　『万葉集全釈』
4　本稿では原田貞義「万葉集の私家集」（『万葉集の編纂資料と成立の研究』二〇〇三年　おうふう　初出一九六九年二月）や梶川信行「金村歌集の論」（『万葉史の論　笠金村』一九八七年　おうふう　初出一九七九年三月）の論などに基づき、「金村歌集出」「金村之歌中出」と記された作品も全て金村の作品として捉える。
5　梶川信行「越道の望郷歌群」（『万葉史の論　笠金村』一九八七年　おうふう　初出一九八一年四月）

6 木下正俊『万葉集全注』は、「時流を憤りつつも、命を捨ててまでして仲麻呂に抵抗する無謀はしない同席穏健派の気持ちを代弁する言葉」とする。

7 梶川氏注5論文

8 井ノ口史「金村の巻九・相聞長歌二首」（『セミナー万葉の歌人と作品』六　二〇〇〇年　和泉書院）

9 『万葉集注釈』

10 小学館完訳日本の古典『万葉集』

11 一四五三番歌の本文については契沖『万葉代匠記』の説により、「虚蝉之」と「命恐」の間に「世人有者大王之」を補うものとする。

12 青木生子「万葉集における『うつせ（そ）み』」（青木生子著作集四『万葉挽歌論』一九九八年　おうふう　初出一九六七年二月）

13 川崎庸之「大王と太夫」（『記紀万葉の世界』一九八二年　東大出版会　初出一九七八年十一月）

14 梶川氏注5論文

15 井ノ口氏前掲論文

16 井ノ口氏前掲論文

17 伊藤博「家と旅」（『万葉集の表現と方法』下　一九七六年　塙書房　初出一九七三年九月）

18 高松寿夫「初期万葉の生成と羇旅」（『上代和歌史の研究』二〇〇七年　新典社　初出一九九四年三月）

19 拙稿「『旅を宜しと』――笠金村『娘子に誂へられて作る歌』についての考察――」（『日本文学』五四-九　二〇〇五年九月）参照

20 拙稿「『海人娘子　ありとは聞けど』――笠金村『神亀三年印南野行幸歌』についての考察――」（『叙説』三七　二〇一〇年三月）参照

＊ 万葉集の本文は『万葉集　CD-ROM版』（塙書房）に、古事記歌謡の本文は小学館新編日本古典文学全集『古事記』に依った。

（くらもち　しのぶ・旭川工業高等専門学校准教授）